

# Vascular Street


 特集

## 医学生の海外研修報告



＜福岡大学医学部 6年生＞  
野中 裕文君



＜福岡大学医学部 3年生＞  
伊藤 友紀さん

はじめに

Vascular Street では、医学生の海外留学報告を、過去、数回特集しています。

海外の医療の現状を実際に知ることは、医学を学ぶ上で良い経験になりますし、医師になった後、拠点を海外に移す理由の一つにもなります。様々な国の医学生と知り合いになって、また、別の国で出会ったり、得られる多くのものがあるそうです。今回は、タイとイタリアです。

### 「Sringerind 病院での ER 実習」

福岡大学医学部6年 野中 裕文

私は昨年、5年生の時に8月12日から8月19日までの一週間、タイのコンケン大学で臨床実習をさせていただきました。福岡大学は一昨年度から、コンケン大学医学部からの短期留学生を受け入れており、彼らは約1ヶ月間、福岡大学病院の各科でBSL実習を行っています。私は一昨年から3年連続でその留学生たちと交流の機会を得ました。留学生のフェアウェルパーティーの際に自分もコンケン大学へ短期留学したいという意思を先生方に伝えたところ、留学をコーディネートしていただくことができました。4日間はコンケン大学の付属のSringerind病院のERで臨床実習をしてきました。今回の留学の目的は英語のスキルアップと、タイの医療現場での研修を通して、私自身の医療に対する視野を広げることでした。



病棟実習では交通外傷による手指の切創の縫合や、爪囲炎の治療等の見学をしました。一番貴重な体験だったのは産科DIC患者さんの症例です。心停止で運ばれてきて、ACLSを行い、胸骨圧迫をさせていただきました。実際の患者さんに行うのは初めてだったため、緊張とうまくできるかの不安が入り混じった中で行っていました。静脈からの採血も



図1

経験することができ、留置針と直針の2つのパターンで手技をさせてもらえました(図1)。BSLでは学生同士で採血の練習をす

る機会がありますが、実際に患者さんに行う経験はなかったのではやはり緊張しました。問診についてはタイ語で行われるため、直接患者さんからお話を聞くことはできませんでしたが、ドクターが英語で説明をしてくださり、特に不自由はありませんでした。しかし、私の医学英語の語彙力が不足していたため、何度も聞き返したり、携帯で調べながらの会話になったりと苦勞しました。

現地の医学生ともたくさん交流できました。福岡大学に実習に来ていた5人と再会し、ERでは5人のメンバーと一緒に実習し



図2

ました(図2)。タイでは、医学書はタイ語のものがなく、英語の原書を使っており、授業の7割は英語で行われます。そのため、学生との会話も英語で行うことができました。抄読会も英語の論文を訳すのではなく、そのまま英語で討論しており、日本に比べて学生が英語を使う機会が非常に多いと感じました。



今回の留学を通して異文化に触れることができたのはもちろんですが、タイの医学生の医学に対する真剣さに接することにより、刺激になったことがとてもいい体験となりました。タイと日本の医学教育現場の比較が視野を広げてくれました。今回の経験を活かし、今後の学生生活をより充実したものにし、自分が理想としている豊富な知識と思いやりをもつ医師になれるように精進したいと思います。



## 「Ospedale Maggiore di Parma での医学研修」

福岡大学医学部3年 伊藤 友紀

私は2018年2月25日から4月3日までの間、イタリアのパルマで臨床医学実習に参加してきました(図3)。



図3 Ospedale Maggiore di Parma

福岡大学医学部 ESS 愛好会では、IFMSA(国際医学生連盟)に団体加盟しており、毎年イタリアやインドネシア、チュニジアなど様々な国から留学生を1ヶ月間受け入れて、留学生が福岡大学病院で実習している間のお世話や、週末には観光に連れて行くなどしています。このIFMSAの留学制度では、福大で留学生を受け入れる代わりに、私たち福大医学部生もこのIFMSAの留学プログラムを利用して、海外

の病院で研究もしくは臨床実習に参加することができます。私が数ある留学プログラムの中で IFMSA を選んだ理由は、『Contact Person の存在』『海外の医学部に1ヶ月間通うことができ、IFMSA 公式の修了書がもらえること』『1ヶ月の宿泊費はタダ』という3点です。『Contact Person』とは、留学期間前から留学生とメールでやりとりしたり、空港までの送迎や診療科の先生との実習の詳細についての調整、留学期間中のお世話役の事です。私自身も、昨年の10月に1ヶ月間 Contact Person として、イタリアから留学できた女子医学部生をお世話していました(図4)。今回の留学では、偶然にも私が福大でお世話をしていたそのイタリアの女子医学部生と同じ大学に留学することになり、彼女だけではなく、またその友人たちとも交流を深めることができ、人とのつながり、出会いの素晴らしさを実感した留学になりました。Contact Person は大変なことはたくさんあるけれど、留学生が喜んで



図4 昨年10月に受け入れた留学生との再会

いる顔や今回のように留学生の母国で再会を果たすことができると、とてもやりがいのある幸せな役割だと感じました。

私は医学部に入学する前から留学したいと考えていて、自分が学んでいる医学研修と留学どちらも経験でき、その証明書までもらえるこの留学は私にとって最高のプログラムでした。また、この IFMSA の留学システムでは実習期間中約1ヶ月間の宿泊施設費は支払う必要はなく、ホームステイもしくは学生寮に滞在することができます。今回私は自分の Contact Person とそのルームメイトのお家に滞在しました。

イタリア留学中の一日の流れは、実習は基本的に午前中で終わり、実習が終わった後に、他の留学生たちと合流してみんなでご飯を一緒に食べたり、観光したりしていました(図5)。週末にはイタリア人の友達とミラノ、フィレンツェ、ヴェネチアなどを訪れたり、パスタやピザの作り方を習って一緒に作って(図6)、観光だけではなくイタリア人の実際の生活を体験できたのもこの留学の魅力だと思います。



図5 ミラノ観光



図6 イタリアの友人の自宅にてピザ作り、パスタ作り

臨床実習では皮膚科に配属され、約1ヶ月の間、Ospedale Maggiore di Parma で実習を行いました(図7)。実習初日からまさかのバストライキにあい、イタリアに来たことを実感させられた瞬間



図7

でした。平日は毎日8時からカンファレンスがあり、カンファレンスの後に自分自身で毎日違う先生に今日指導してもらえるかをお願いしに行くところから実習が始まります。先生の許可を得た後は12:30まで、先生について実習をしていました。実習内容は、General week と Surgical week にわかれていて、General week ではメラノーマのラボを見学させていただきました(図8)。



図8

イタリアでは遺伝要因の他に重要な環境要因として肌を焼く習慣があるために、日頃から家族でメラノーマの検診に参加したりするなど、メラノーマのラボはいつも患者さんでいっぱいでした。実際に私のイタリアで仲良くなった友達のほとんどが、日に焼けた肌の方が健康的で美しいとっていて、日本人が色が白い方が綺麗だと思って夏に日傘や日焼け止めクリームで皮膚を焼かないことを不思議に思っていました。国によって美しさの基準が異なること、またその考えの違いが疾患にも結びついていることは非常に興味深く感じました。Surgical weekでは、手術中の糸を切ったりするなど2年生なのにも関わらず、学生ができる範囲の最大限手術に関わらせていただきました(図9)。実際に教授から糸の結び方や縫合方法を教わり、すぐに手を動かしたり見学させていただけたことは、机上での勉強より何倍も興味が湧き、毎日実習時間が過ぎるのがあっという間でした。もともと別の診療科を希望していた私は、皮膚科での実習に対してあまり乗り気ではなかったのですが、ある日、皮膚科の先生に『なぜ皮膚科を選んだのか』と質問したところ、『ゆき！何を言ってるんだ！皮膚科ほど患者さんの人生を変えることができる仕事はないよ！女の子の顔にあるブツブツを治してあげただけで、次の日からその子はキラキラして毎日幸せに過ごせるんだよ！』と言われて、そこから私の中での皮膚科の印象が一変しました。1ヶ月間の実習を通して、いかに座学の勉強がこれから実習



図 9

を行う上で重要であるか、また、実習で学んだことをより生きた、使える知識として習得するためにはこれから3年生や4年生で勉強する内容が重要だということを改めて実感しました。

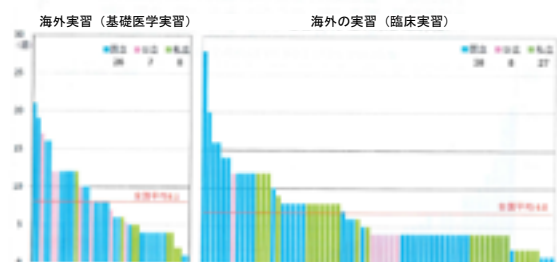
イタリアでの研修のなかで驚いたことは、私が想像していた以上にイタリアの先生や学生に英語が通じなかったことです。留学する前は、世界の共通言語が英語だとおもっていたのですが、実際にはイタリアの文化や医療を学ぶにあたって、その国の言語を理解し、積極的に意思疎通をはかることが重要だと実感させられました。初めはイタリア語でコミュニケーションをとることが難しかったのですが、なんとかコミュニケーションをとろうとイタリア人の話し方の真似をして話したり、学んだイタリア語は積極的に使うように心がけました。そのかいもあって、最終的には先生たちが最初以上に実習に関わらせてくれたり、イタリア人の学生とも仲良くなることができました。

今回の留学を終えて、自分自身が Contact Person を経験していたからこそ受け入れる側の大変さを理解することができ、人の温かさをより身にしみて感じたイタリア留学でした。留学を通して、両親や受け入れてくれたホストファミリー、留学をサポートしてくださった周りの方々のおかげで多くのことを学ばせていただきました。海外での医学研修をおえたこと、またこのイタリア留学期間中に文化の異なるたくさんの人と関わったことは、将来の自分にとって大きな自信になったと思います。今回私自身がたくさんの方々をサポートして頂いたように、これから福大に来る留学生たちが充実した留学期間を過ごせるように全力でサポートし続けていきたいです。

### Prof. Saku's Commentary

私は、一般社団法人 全国医学部長病院長会議の、カリキュラム調査ワーキンググループとして数年間活動しています。平成 29 年度 (2017 年)「医学教育カリキュラムの現状」で、海外実習の現状を示したグラフを紹介します。このようなデータは、福岡大学医学部を知る上で有用なものと考えますが、海外実習に関しては、福岡大学医学部はまだまだ下位の方です。海外で 25 週をこえる臨床実習をする医学部も国内には存在します。

### 海外実習の促進



AJMC カリキュラム調査 WG 資料 (平成 29 年度)